

第4部会

適度に援けられつつ、田中による中間層の意識論をさらに深めることは、和解に根ざす霊的平和論を基礎付け、さらにインカルチュレーションの意識論的次元を開示しえるだろう。

新渡戸稲造と国際交流

森 上 優 子

新渡戸稲造（一八六二—一九三三）は、近代日本を代表するキリスト者であり、また国際交流活動に尽力した人物として広く知られている。彼は、大学入学時に行われた面接の際、「日本の思想を外国に伝へ、外国の思想を日本に普及する媒酌になり度い」とその抱負を述べ、それ以来「太平洋の橋」となっており、積極的に国際交流活動を展開した。本発表では、この活動を支えた思想を考えてみたい。

新渡戸が行った国際交流活動は、欧米を中心として行われたことが特色のひとつとして挙げられる。彼は、幼少期から青年期にかけて、学校教育などを通じて異文化である西洋と出会う機会に恵まれ、日本人としての自覚を深めていったと思われる。新渡戸は『武士道』の執筆動機を「人間に東西の区別はない」ことを主張しようとしたと述べるが、これは、西洋が東洋を劣等視するような当時の現状を打開しようとする意識の現れであったと言えるであろう。

新渡戸は、西洋と東洋との間に共通する項として「人間」を打ち立てる。「西洋人も人ならば、日本人も人である。人とし

ての共通点があり得るならば、東西の差異を論ずると同時に、またその共通点をも大いに記憶してゐなければならぬと思ふのである」（『西洋の事情と思想』）。このように新渡戸は「共通点」を主張することを繰り返すが、その根底には人間の心に「内的制裁」とされる「内部の矩」が存在するという確信があった。新渡戸は、その「内部の矩」の例として「各自の心の中に存する一種の声、孟子の云ふ是非の心、陽明学者の云ふ良知、ソクラテスの教へた「デイモン」（自由国民の底力）を挙げ、「自己以上の偉大なる權威を有するもの」とした。この「内部の矩」こそ東西の区別なく、老若男女の別なく、万人に備わるものと理解されたのである。心に価値を見出した新渡戸は、「内部の矩」を認識することにより、日本人は日本人という枠にとどまる存在から脱して、「世界共通の人類の一員」（『西洋の事情と思想』）となる、つまり、日本が西洋に比肩する存在へと引き上げられると考えた。

『西洋の事情と思想』のなかで、新渡戸は、日本人の性質として「理論に走る」、「コンミュナル、共存性」が発達している、「直観的な心的能力を持つ」という点を挙げている。そして同時に、西洋人の性質とする「プラクチカル」と「内部の矩」を重視することによる「自己尊重」に学ぶ必要性を主張し、日本の変革を語る。「日本の長所はあくまでも拡張するが、短所と思はれるところは、どしどし外国の長を採つて補ふやうに心がけたい」（『西洋の事情と思想』）というように、新渡戸は、日本人に対して自己の長所に他者の長所を加え、自己改造を行い続けていくことを要請した。この「内部の矩」を重視し

て生きる西洋にこそ、自己に内在する自己ならざるもの、超越なるものを認識して生きるという人間存在の理想的なあり方が実践されていると新渡戸は見たのである。ここに、彼のクエーカー派を通じたキリスト教信仰に基づく人間観が反映されていると考えられる。

新渡戸は、「内部の矩」を核とする思想としてデモクラシーを挙げ、「世界の大勢」と予言する。そして、彼はデモクラシーを「平民道」と呼び、日本の道徳観念として象徴した武士道精神に替わる思想とした。

以上みてきたように、新渡戸が西洋との交流を深めたのは、人間存在のあり方において、西洋が日本の手本であると考えていたからであると考えられる。

聖書・学問・共同体

——東京大学「矢内原忠雄展」からの一報告——

柴田 真希都

二〇〇九年三月末から六月末にかけて、東京大学は付属の駒場博物館において「矢内原忠雄と教養学部」展を開催した。会期中には約五千人が訪れ、月に一度ずつ行われたシンポジウム企画はどれも好評を博した。特に「矢内原忠雄とキリスト教」をテーマとした最後のシンポジウムでは、東大駒場キャンパスで最も大きい講堂を一杯にするほど全国から沢山の人が訪

れ、関係者一同を驚かせたのであった。

さて、この「矢内原忠雄と教養学部」展は、矢内原が初代学部長を務めた東大教養学部創設六〇周年を記念して企画された。矢内原は二年半で教養学部長の地位を離れ、総長に就任するが、彼は総長となっても教養学部の行く末と学生達の勉強環境の向上に特別の関心と努力を払った。しかしながら、そのような矢内原と彼を支えた人達の苦闘の記録は既に学内外に十分には残っておらず、この展覧会企画を後押しした教養学部六〇年を記念する草創期にまつわる展示資料は結果として手薄となったといわざるをえない。

それとは対照的に、矢内原忠雄の学術的側面、そしてキリスト教伝道の側面は、豊かな資料に恵まれつつ、充実した展示内容となったといえる。従来、駒場博物館は矢内原が南洋群島の調査旅行から持ち帰った数々の現地品のコレクションを所蔵していたが、それらが一同に公開され、視覚的に華やかな印象を与えたと共に、各方面の援助を借りつつ、彼の現地調査において使用された文書資料や図、絵葉書や名刺などが集められて、植民政策学者矢内原忠雄についての広くまとまった知識が提供されたと思われる。

また、矢内原忠雄を語るのに不可欠な側面であるキリスト教伝道についても、彼の立脚した無教会キリスト教の独自性、さらに第二次大戦中の政府社会からの激しい弾圧にもかかわらず、一貫して時局に対する批判的立場を堅持した個人雑誌『通信』『嘉信』や講演活動の軌跡が、数々の資料によって後づけられた。会場では各所に飾られた、生涯の秘蔵写真の